第 220 号　令和 7 年 9 月 23 日発行

中田かわら版　10 月号

～中田地区の地域活動をお知らせします～

発行：中田地区経営委員会　　協力：中田連合自治会　泉区役所
制作：中田かわら版制作編集委員会　　横浜市踊場地域ケアプラザ

■この人に会いたい〈81〉

モットーは「明るく楽しく」

中田地区シニアクラブ連合会会長　山本　勝利さん　85 歳　若草

山本さんの住む若草自治会は、立場交差点からかまくら道を通信隊へ向かう途中の萩丸交差点左側から始まり、葛野小入り口の交差点のところまでが町内になります。

山本さんはその若草長寿会の会長になって 12 年目。「町内を明るく楽しく誰でも参加しやすい」ことをモットーに努めてきたと言います。最初の年に区からペタンクボールの提供があったので中田第五公園で月 4 回定期的に練習を始めることになったとのことです。

室内の遊びも・・と、マージャンも開始。男女問わずだが初めての女性が多く男性の協力を得て今では三卓以上の人数でいつも和気あいあいとにぎやかな会場になっています。

昨年 8 月には【全国老人クラブ連合会】から『2024 活動賞』を頂いています（写真下）。タウンニュースにも掲載され、YCV の取材も受けた自慢の長寿会です。

山本さんは静岡県賀茂郡松崎町で生まれ育ち、24 歳で結婚。29 歳の時に中田に定住してから 50 年以上になります。学生時代は電気機器を専攻してきたことからソニー株式会社に勤務、品川まで通った。「あの頃、立場から戸塚までの大渋滞は皆さん経験があると思うが、耐えられず汲沢経由のバスを利用した。会社から経費が掛かるとおしかりを受けた」と、その頃を思いながら苦笑する山本さんの笑顔におちゃめな人柄を感じました。

ソニーに入社してさらに勉強させてもらった事が、今日の自分の役に立っている・・と感謝の思いもあると語っています。

■　■

退職して間もない 2002 年(63 歳)、若草自治会会長を任命された。当時の山百合自治会会長の元市会議員・中島憲五氏から「通信隊の電波障害を防ぐ」活動の協力依頼を受け、町内会長を 1 年で辞め、アンテナ協同組合のメンバーとして奮闘した。通信隊から 1 キロ圏内にある住宅を対象に中田中学校に共同アンテナを設置。2004 年からアンテナ協同組合の会長として活動したが、やがてアナログからデジタル化に移行の為アンテナは不要となり 2010 年解散となった。しかしその後始末で全世帯に返金の手続きなどを含む作業が本当に大変だったとポツリと本音を聞いた気がします。

いつもにこやかに人の話をじっくり聞き、安心できる人柄が、今回の中田地区シニアクラブ連合会会長に推薦されるきっかけになったのだと想像できます。

『中田地区シニアクラブ連合会会長』としての思いは、「若草長寿会だけでもまとめていくのが大変なのに、地区シニアの集まりはそれ以上に多様でさらに大変。苦難の業だが自分の責任の重さも感じているので、会長としての役割はしっかりと全うしたい」と熱意を語ってくれました。

そんな山本さんに奥様のすみ代さんは「一緒に頑張っていくしかないですね」と、共に自治会の活動にも参加しているステキなご夫婦でした。

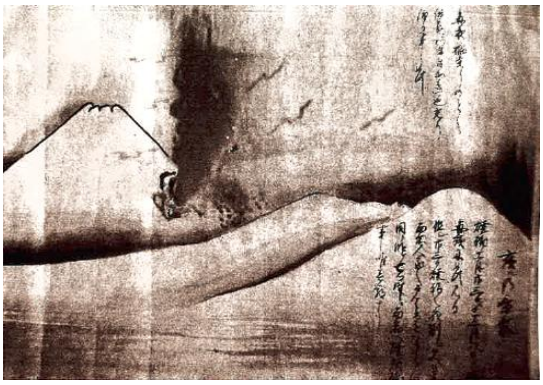
（松本純子）

＜訂正:9 月号記事内インタビューは「山梨監督」ではなく「小林コーチ」の誤りでした。訂正しお詫び致します。＞

記事にある情報をより詳しく知りたい方は、踊場地域ケアプラザ　嶋（しま）まで問い合わせください。
TEL　801-2114　FAX　801-2923

「富士山大爆発はあるのか」（中）

宮田　貞夫



富士山の噴火はあるのか、と言われたら私は「必ずある」と答えるだろう。「ない」という方が現実的ではないからだ。富士山が最後に爆発してから 300 年以上経ち、今は平静であるが貞観 6 年（864 年）から約 800 年後に宝永 4 年（1707 年）の爆発が起きている。例えば富士山が今後 1000 年静かでも、若い富士山は、ちょっと昼寝をしているようなものだ。日本や外国でも数百年から数千年も経って突然大爆発を起こした火山がたくさんある。日本では磐梯山（福島県）が 1082 年後に、雲仙岳（長崎県）が 707 年の休止期間の後、爆発している。

宝永の大爆発に関しては多くの記録や資料が残されている。東海道の宿場「原」（静岡県沼津市）で代々、役場で記録係を務めた土屋家に伝わる絵図は、その一例だ。同じ場所から噴火の推移を克明に描いている貴重な記録になっている。「昼乃景気」「夜乃景気」そして「焼納り乃景気」の 3 つの絵図からなっている（上の絵図は「夜乃景気」）。「噴火から 16 日目の未明にドカンと鳴り、それを最後に空が晴れ渡り、山（宝永山）ができていた」とある。

■　　■

貞観の時は大量溶岩を穏やかに流したのに対して宝永噴火では溶岩流はほとんどなく膨大な量の火山灰や軽石、火山礫（れき）を爆発的に噴き上げる噴火だった。噴煙は上空 1 万メートルにも達した。

火口近くの須走では集落は壊滅、西風に乗った火山灰は関東一円に広がった。噴火当時、どのくらい凄かったか、その様子を伝える記録が御殿場市の長坂遺跡から想像できる。この時、火山灰は 1.8 メートルも積もった。

「部屋の炉端のそばには砥石と鎌があり、座敷には茶碗が二つと雁首（キセル）があった。鎌を研いでいる時、来客があり二人でお茶を飲んでいた。縁先には包丁があった。主婦が昼食の用意でもしていたのだろう、慌てて包丁を持ったまま外へ出ようとしたと思われる。家人はお金をとる間もなく逃げ出した。寛永通宝 250 枚がざるの中に置かれていた。鍋や釜がなかったのは、それを被って逃げたからではないか」と、ある本の作者の解釈だが、噴火の瞬間の臨場感が出ている。これら発掘品は御殿場の「国立青年の家」に保管されている。

※参考資料　『富士山』（朝日新聞社）、『富士山大ばくはつ』（小峰書房）
『世界遺産・富士山』（別冊宝島）、『とみずか』（戸塚区歴史の会）

編集後記

10 月 1 日、「赤い羽根共同募金運動」が始まった。胸に赤い羽根をつけている人を見ると、自分も福祉に貢献したい気持ちになってくる。集まった基金は困っている人や障碍者などの施設、運営に役立っている▲昭和 22 年 4 月、映画「少年の町」のフラナガン神父の提言で長崎、佐賀、福井の各県で始められたのが始まりと言われている▲「かわら版」の始まりは平成 19 年 6 月で今年で 18 年目、10 月号で 220 号を迎えた。「かわら版」は取材記事が主で、構成が素晴らしいこと。中田の情報をくまなく伝え、中田の歴史を残していく気概で、発行している▲81 回目の「この人に会いたい」の見出しは「明るく楽しく」がモットー。書く人、書かれる人の気持ちが伝わってくる。（宮田貞夫）

◎発行：中田地区経営委員会「かわら版」制作編集委員会
委員長　宮田貞夫　　編集長　松本 正
編集委員；小島敏子、田中 進、河内満明、松本純子、鈴木賀津彦、嶋　宏之